



Hamamatsu Museum of Musical Instruments

浜松市楽器博物館だより

No.14

1998.12.30

グアテマラ楽器紀行

浜松市楽器博物館では、平成9年度より海外フィールドワークを行い楽器のつくりや、その楽器が使われる場面、演奏の仕方などについて調べています。今年度の調査はグアテマラ等中南米の各地です。

調査期間：平成10年12月2日(水)～12月5日(土)

調査地：グアテマラ共和国(チチカステナンゴ村、グアテマラ市、アンティグア市)

グアテマラ共和国は、メキシコのすぐ南に位置し、国土面積は日本の約3分の1、人口は約1000万人ほどになります。今回調査に赴いたチチカステナンゴ村、グアテマラ市、アンティグア市は、それぞれ標高2,071m、1,499m、1,530mといずれも高地にあるため、熱帯地方とは思えないほど朝晩の冷え込みは厳しく、セーターは欠かせません。



グアテマラの大型マリмба(山城信二氏撮影)

グアテマラの楽器 マリмбаは、グアテマラのシンボルともいえる楽器です。スペイン人による征服の時代(16世紀)に、アフリカから連れてこられた奴隷たちによって持ち込まれたというのが定説となっていますが、それよりもはるか以前からこの国にあったのではないと思われるほど、マヤ系からラディーノ(マヤ系先住民とスペイン人との混血)に至る多くの民族に使われています。

マリмбаの初期のかたちを残していると思われる大変貴重な資料として、「マリмба・デ・テコマテス」と呼ばれるマリмбаがあります。共鳴筒として取り付けられた細長いひょうたんに穴があけられ、豚の腸の膜を貼ってピリピリとした雑音を出す機能を持っているところが西アフリカの「パラフォン」によく似ています。この初期型のマリмбаに調律された共鳴筒をつけたり、ピアノの黒鍵部分にあたる鍵盤をつけたりと、長い年月をかけて様々な改造がなされました。

今日、ある時はポピュラー音楽に、またある時はクラシック音楽にと、あらゆる音楽シーンで使われるマリмбаですが、グアテマラで現在の形まで育てられ全世界に羽ばたいていったことを考えると、この国の人々が「マリмба」を国のシンボルとして大切に扱うのもうなずけるでしょう。

海外フィールドワーク速報展
2月16日(火)～3月22日(月)

新着資料展

来る1月26日(火)から2月21日(日)まで、「新着資料展」を開催します。この展示は、毎年この時期に開催されており、1年間の資料収集活動の成果の発表とともに、貴重な資料をご寄贈くださった方々を顕彰するものです。

展示予定資料の中から、1点ご紹介しましょう。

写真は、イタリア・クレモナ市在住のヴァイオリン製作家、石井高氏製作のヴァイオリンです。氏は、クレモナ市長より「マエストロ・リウタイオ(楽器づくりの名人)」の称号を与えられる等、ヨーロッパをはじめ世界的にも有数のヴァイオリン製作家です。また、その生涯をかけた「天正少年使節団」とその楽器について研究されており、著書も出版されています。写真の作品は、その研究の一端でもある聖クリストフォロ教会(北イタリア・ヴェルチェッリ市)の壁画『オレンジの聖母マリア』(1529年)の中で天使が演奏している小さなヴァイオリンを復元したもので、石井氏自身により寄贈されました。



この他にも、ヨーロッパの金管楽器や、お隣の韓国の楽器、浜松ゆかりのリード・オルガン等が展示されます。いずれも、今後楽器を研究していく上で重要な資料となるでしょう。

企画展「歌舞伎の音楽と楽器」終わる

開催期間：平成10年9月29日(火)～10月25日(日) 講演会：10月24日(土)、講師：目代清先生



日本の伝統芸能の代表選手として、約300年の歴史をもつ歌舞伎。現在でも東京、名古屋、京都、大阪に大歌舞伎専用の劇場があり、ほぼ毎日どこかで歌舞伎が公演されています。また、一時は途絶えていた地方での素人歌舞伎も、近年復興されるところも多く、歌舞伎の根強い人気を感じさせます。

歌舞伎は、舞踊、演技、音楽によってつくられる総合芸術です。今回の企画展「歌舞伎の音楽と楽器」ではこの中でもすれば見落とされがちな音楽と楽器について取り上げました。

歌舞伎の始まりは、江戸時代の始まりとほぼ時を同じくします。初期にはそのころ既に芸能として確立していた能の楽器(四拍子：能管、小鼓、大鼓、太鼓)をそのまま取り入れましたが、間もなく当時外来楽器として物珍しさのあった三味線が舞台上に登場します。もともとは見世物として取り入れられた三味線でしたが、義太夫節(竹本)、常磐津節、清元節、長唄と呼ばれる、いわゆる「所作音楽」の主要楽器として三味線は必要不可欠なものとなりました。

一方で舞台裏で演奏される「下座音楽」には、銅鑼、本釣鐘、オルゴールなど様々な鳴物が使われます。これらの楽器あるいは道具は、場面の状況を表すものとして使われますが、その中でも大太鼓は雨、雪、川、波、などの自然現象のみならず、果ては超自然的な幽霊の音までも表現してしまう優れたものです。もちろん雪や幽霊の音は現実ではありえないものですし、波や川を表す大太鼓の音も聞いてすぐに分かるという音でもありません。観客はあくまでもこういう音が出たらこういう場面という約束事を理解して歌舞伎を見ているのです。

写実的な現代劇に比べ、約束事の多い歌舞伎は初めての人には少し難解に思えるようですが、江戸時代の町人たちは老若男女、身分の上下を問わず、歌舞伎を楽しんでいたことを考えると、決して難しいとは思えません。まだ歌舞伎をご覧になったことのないという方、今回の企画展で紹介したちょっとした約束事を思い出しながらぜひ一度芝居小屋へ足を運んでみてください。

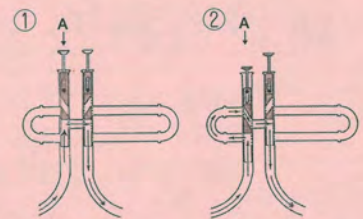
楽器アレコレ

写真の楽器は、当館所蔵のA.クルトワ作の**コルネット**です。クルトワは、金管楽器製作で名を残した一族で、当館には他にホルンやトロンボーンが収蔵されています。

金管楽器の仲間は、相互に影響を与えあう中でその姿形や機能を変化させてきました。そこで、以下のお話も金管楽器全体に関わってきます。

金管楽器の演奏時、音の高さはどのようにして作り出されるのでしょうか。先づ、管の長さが一定であっても、吹き方を変えることで、高さの違ういくつかの音を出すことができます(こうして出る音の並びを倍音列と言います)。次に管の長さをより長くすると低い音が出(倍音列が低い方へ移動し)、短くすると逆の結果が得られます。主に以上二つの組合せで演奏に必要な音を作り出すのです(正確には他にもいくつかの方法があります)。

管の長さを変える方法には主に①リコーダーのように管の側面に孔を開けて実質的な管長を変える。②管を付け足すなどして管の長さを長くする、の二種類があります。今では多くの金管楽器は、②の方式を採用しています。写真のコルネットは②の方式であり「シュテルツェル・ヴァルヴ」と呼ばれる方式で管の長さを長くしています。このヴァルヴは、19世紀の前半に多くの金管楽器に採用されたものです。仕組みは、右図のとおりです。(K.O)



管の道筋

- ①ピストンを押さない時は、最短距離。
- ②例えばAのピストンを押すと、管長が長くなる。



興味津々

ジャワ・ガムランの音風景～従順・謙虚・平等の音楽美～

10月3日(土)に研修交流センター21音楽セミナー室で開催されたアクトシティ音楽院・世界の楽器のレクチャーコンサート第3回は、インドネシア・ジャワ島中部のガムラン音楽。題して「即興と創造～ジャワ・ガムランの音風景～」。

ガムラン音楽と言えば、だいたいバリ島のきらびやかでスピーディなものを思い起こすのですが、ジャワ島中部には、それとは別の様式のガムラン音楽が存在します。バリの音楽が金色に輝く急流のような音楽とすれば、ジャワのそれは、燦し銀に輝きゆったりと流れる大河のようなものといえるでしょうか。

解説者の風間純子さんは「肩の凝らない空気のような音楽」と述べておられますが、どれが旋律か伴奏かわからない、すべてのパートが平等に役割を分担して互いを尊重しながら時の流れを進んで行く。従順に相手に寄り添い、謙虚に自己を即興で主張する。そんな音楽、音の風景でした。

風間さんと演奏グループ“ランバン・サリ”のメンバーの指導を受けながら、聴衆も演奏を体験。15分程経つと、なかなかすばらしいアンサンブルになったではありませんか。体験者のひとりがいわく「ガムランって簡単じゃない！」いえいえ、永い伝統を誇るこのガムラン、東洋の芸術に共通する神秘性があるのです。「入りやすいが奥は深く限りがありません。そこがまた魅力なのでしょう。」と風間さん。ジャワ・ガムランの虜がまた増えた2時間でした。(K.S)



楽器博物館の調査活動

資料を収集し展示公開することは博物館の大切な仕事ですが、集めた資料をさらに詳しく調査したり、また、その資料の背景となる文化を調査することも、もうひとつの大切な仕事です。この仕事として、楽器博物館では「浜松市の楽器産業の歴史」と「三遠南信地域の郷土芸能」の調査を4月から3年計画で行っています。

楽器産業は浜松市の主要産業のひとつで、特にピアノの生産台数は国内ピアノ生産のほぼ100%になります。山葉寅楠が明治33年に浜松で初めてピアノを作ってからもうすぐ100年。この間の多くの先人たちの努力により、浜松のピアノは量的にだけでなく、質的、コストパフォーマンスにおいても世界一と言われるまでになりました。その先人たちの足跡を辿り、浜松におけるピアノ作りの変遷をまとめてみたいと考えています。

また、三河、遠州、南信州地域には“花祭り”など貴重な民俗芸能が残っています。郷土歌舞伎もそのひとつで、古くは江戸時代から伝わる農村の歌舞伎は、庶民の芸能として地域毎に特色を持っています。この郷土歌舞伎の現状を把握し、芝居や音楽を地域の人々がどのように伝承してきたのか、またこれからどのようにして後世に伝えて行くのかを記録したいと考えています。これまでに、大鹿村(長野県)、小原村(愛知県)、作手村(愛知県)、一宮町(愛知県)、湖西市(静岡県)、佐久間町浦川(静岡県)を調査し、VTRと写真に記録しました。

以上の調査は3年後に報告書にまとめる予定ですが、1年毎に報告会も行います。今年度の報告会の予定は次の通りです。詳しくは広報はままつでお知らせします。

- ・講座「浜松楽器風土記～ピアノ作りの変遷1～」1月30日(土) 14:00
- ・講座「三遠南信芸能調査報告会～郷土歌舞伎のいま～」2月27日(土) 14:00

これからの催し物

事業名	開催日	内容
新着資料展	1/26(火)～2/21(日)	今年度収集した楽器を披露します。
講座・報告会	1/30(土)	浜松楽器風土記 ～ピアノ作りの変遷1～
海外フィールドワーク速報展	2/16(火)～3/22(月)	中南米の楽器や音楽文化についての海外調査の速報です。
講座・報告会	2/27(土)	三遠南信芸能調査報告 ～郷土歌舞伎のいま～
遊牧民の楽器	3/27(土)～5/9(日)	モンゴル民族を中心に遊牧民の楽器とその音楽や生活を紹介します。
展示室ガイドツアー	1/10・2/14・3/14	展示品の解説を行います。
ミュージアムサロン	1/17・2/21・3/21	楽器文化ワンポイントミニ講座です。

博物館日誌9～11月

9/13(日)	展示室ガイドツアー「楽器の祖型を訪ねて」
9/20(日)	ミュージアムサロン「大正琴の歴史」
9/29(火)～10/25(日)	企画展「歌舞伎の音楽と楽器」
10/11(日)	展示室ガイドツアー「あなたも歌舞伎がみたくなる!？」
10/24(土)	講演会「江戸時代の芝居小屋」
10/25(日)	ミュージアムサロン「歌舞伎の楽器」
11/8(日)	展示室ガイドツアー「楽器の素材をしてみよう～弦楽器編～」
11/15(日)	ミュージアムサロン「管楽器の歴史について」

お知らせ

新着資料展では貴重な資料をご寄贈いただきました以下の方々の資料も展示いたします。
ここにご芳名を記し、改めて御礼申し上げます(順不同、敬称略)。

石井 高: ヴァイオリン制作工程パネル ヴァイオリン	田中享子: アンクルン
福地啓枝: 薩摩琵琶	塚田 博: 八雲琴譜
中山洋子: 金管楽器他16点 グスレ	加藤元昭: リードオルガン
田島桂子: 三味線撥	平川淳三: 箏、免許状ほか5点
	勝川達也: ディルルバ

9・10月の観覧者数

大人	10,149
中人	192
小人	1,703
幼児	297
合計	12,341

利用案内

開館時間: 火曜日～日曜日 午前9:30～午後5:00
休館日: 月曜日(祝日にあたる時は開館)、祝日の翌日、年末年始、
その他資料整備等のために定める日
一祝日前後の開館日については、変更することがございますので当館にご確認下さい。一

観覧料:	個人	団体(20人以上)	団体(80人以上)
大人(大学生以上)	400円	320円	240円
中人(高校生)	200円	160円	120円
小人(小・中学生)	100円	80円	60円

※館内には、貴重品以外のお荷物は持ち込みできません。

浜松市楽器博物館だより

1998年12月30日発行

No.14

編集 浜松市楽器博物館

〒430-7790 静岡県浜松市板屋町108-1

TEL.053-451-1128

FAX.053-451-1129

印刷 オオゼキ写真印刷株式会社